

二〇二三年度

入学試験問題

I 国 語

(五十分)

注 意 事 項

- 1 開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 試験問題は29ページあります。
- 3 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 4 解答用紙にマス目(例:

--

)がある場合は、句読点などもそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書きなさい。なお、行の最後のマス目には、文字と句読点などを一緒に置かず、句読点などは次の行の最初のマス目に書き入れなさい。
- 5 終了の合図があったら、すぐに解答をやめなさい。

受験番号

--	--	--	--	--

問題は次のページから始まります。

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

加久夜かくやの長ながの帯刀※1節信たちは数奇者たはきときのかなり。始めて能因※2に逢ひ、相互かんじよに感緒かんしよ有り。能因云はく、「今日見参※2の引出物ひきだすものに見るべき物はべ侍り」とて、懷中より錦の小袋を取り出だす。その中に鉋屑かなくち一筋有り。示して云はく、「これは吾が重宝※3なり。長柄※3の橋造るの時の鉋くづなり」と云々。時に節信喜悅甚だしくて、また懷中より紙につつめる物を取り出だす。これを開いて見るに、※4かれたるかへるなり。「これは井堤※5の蛙かはづに侍り」と云々。共に感歎※2しておのこれ※2を懷にし、退散すと云々。今の世の人、嗚呼ああと称すべきや。

源經兼下野守にて国に在るの時、ある者便書※6を持ちて国府に向ふ。叶※6はざるの間、術すまちなきの由よしなんと云ひて、はかばかしきこともせず。冷然として出でて一、二町ばかり行くを、更によびかへしければ、不便ふびんなりとて然るべき物など賜たまふべきかと思ひて、なまじひに※7歸り来るに、經兼云はく、「あれ見給へ、室※7の八嶋やしまはこれなり。都にて人に語り給へ」と云ふ。3いよいよ腹立つ氣有りて出で了はぬと云々。（退出してしまった）

（『袋草紙』一部改変したところがある。）

※1 帯刀：舍人帯刀の略で、帯刀して東宮を護衛する役。

※2 見参の引出物：お越しになった記念の贈り物。（ここでは記念に見せる物。）

※3 長柄の橋：淀川の支流にかかる橋。歌枕として著名。「我ばかり長柄の橋は朽ちにけり難波のことも古るる悲しさ」（後拾遺・雑四・赤染衛門）など、「古いもの」「壊れたもの」のたとえによく用いられた。古今集仮名序に取り上げられたこともあり、「長柄の橋」に関する木屑や橋柱の残りは歌人たちの憧憬の的であった。

※4 かれたるかへる：干からびた蛙。

※5 井堤：山城の国の歌枕。清流で知られていた。「かはづなく井出の山吹散りにけり花のさかりにあはましものを」（古今・春下・読み人しらず）など、山吹や蛙の名所とされた。

※6 便書：書状。

※7 室の八嶋：下野の国の歌枕。清水の水が蒸発して煙のように見える地とされた。「いかでかは思ひありとも知らすべき室の八島の煙ならでは」（詞花・恋上・実方）など。

問一 ― 1 「数奇者」の意味として、最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 文化的教養に秀でた人物。
- 2 古い物に愛着を持つ人物。
- 3 色を好み洗練された人物。
- 4 風流に強く執着する人物。

問二 ― 2 「共に感歎して」とあるが、どうして「共に感歎」したのですか。最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 お互いの品が和歌に関する珍しい貴重なもので、素晴らしいと思ったから。
- 2 互いに相手の品をみすばらしく思い、自分の方が優れていると思ったから。
- 3 お互い常人には理解しがたい物を大事にする者と分かり、嬉しかったから。
- 4 互いに所持品の価値を認め合い、自分の品が正当に評価され嬉しかったから。

問三 ― ― ア「よびかへし」イ「帰り来る」とあるが、この動作の主体人物の組み合わせとして最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|---|-----|---|-----|
| 1 | ア | 節信 | イ | 源経兼 |
| 2 | ア | ある者 | イ | 源経兼 |
| 3 | ア | 源経兼 | イ | ある者 |
| 4 | ア | 源経兼 | イ | 節信 |

問四

—— 3 「いよいよ腹立つ氣有りて」とあるが、なぜ「いよいよ腹立」てたのか。最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 何か少しでも氣慰みにもらえるのかと思って嫌々戻ったのに、相手はただ世間話をするだけで全く時間の無駄だったから。
- 2 無礼な形で出てきたことを謝ろうと思って仕方なく戻ったのに、何の關係もない歌枕の地のことで話の腰を折られたから。
- 3 先刻の対応を氣の毒に思い詫びようと思って嫌々戻ったのに、くだらない世間話をしている相手の呑氣さが癪に障ったから。
- 4 何かもらえるのだろうと思って仕方なく戻ったのに、自分には何の利もない歌枕の地を自慢げに紹介されただけだったから。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

——「私（ターター）」は愛車の「お紺」を運転中、「お紺」からあることを告げられる。以下の文章はその続きです。——

「わたし、ご臨終なのよ」

¹ わざと軽く、ふざけた調子でいうものだから、私はしばらく、その意味がわからなかった。それから、ソファの上でとびあがった。

「何だって？ そんな馬鹿な！ 君のボディはまだこんなに艶があってピカピカで、部品もしっかりしてるし、頭脳もたしかだし、どこも悪いところなんか、ないじゃないか！」

お紺は悲しそうに答えた。「^{ベッチンガー}熱交換装置にガタがきてるのよ」

私は少し安心した。「それだけ？」

「そうよ。でも、熱交換装置が悪いと、乗る人の生命の安全率は低下するわ」

「なんだ」私はわざと、軽い調子でいった。「じゃあ、取り替えればいい」

「駄目よ！」お紺はあわてていった。「^a契約イハンになるわ。あなた、私を買ったとき、契約書読んだ^{はず}じゃないの。部品は買えないのよ。古い車が使えなくなったら、必ず新しい車を私の製造会社から買わないといけないのよ。それに車は、少しでも悪い部分があったら、もう、乗っている人の安全性を^bホシヨウでなくなるんだから、すぐに人をおろさなきゃいけないの」

「しかし、それは^ア不合理だ。君は、部品を取り替えさえすれば、新車同様の……」

「ターター。わかってよ。駄目なのそれは……」お紺は吐息と共に、駄々っ子をなだめるように私にいった。「新車を買った方が、安くつくのよ。だいいち、持ち主にそんなことしてもらうと、私はイハンすることになるのよ。車の規則で……」

「そうとも、君の持ち主は僕だ！」私は叫んだ。「君はもう君の会社のものじゃない。僕のもんだ。僕が君を買ったんだ。部品の方が高くつこうが、熱交換装置が何万円しようが、問題じゃない。僕には君が必要なんだ。わかるかい、お紺、君が必要なんだ」

「だから私、いいなくなかったの」彼女の声は、おろおろしていた。「あなたがそういうだろうと思って、心配だった。でも、そんなことすると、あなたは罰せられるのよ。法に触れるのよ。契約イハンで」

「くそ、あの会社め……」私は呻いた。^{うめ}「新車ばかり次から次と作りやがって、あの業つくばりめ……」

「でも、私もうあなたに買われてから、四年にもなるのよ。オールド・ファッションよ。型が古くなりすぎてるわ。他の人たちは、一年足らずでモダンなものに買い替えてるのに……」

「他の奴なんかくそくらえ。新しい車なんかくそくらえ」私は彼女の苦しんでいない様子に腹を立てた。こんなことが、しごく当然と思っている様子にも腹を立てた。いくらロボットが人間に奉仕するために作られたものであるとはいえ、これでは、あまりにもひどい。可哀そうだ。「君は、もう僕とつきあうのが面倒くさくなったのか？」

「そんなこと、ないわ」

「僕が、もう嫌いか？」

「どうして、そんなこというの？」^A泣きそうになって、彼女はいった。「私だってつらいわ」

「だったら、僕から去らないでくれ」私は懇願した。「べつに、僕を乗せて走らなくてもいいんだ。ガレージで休んでりゃいいんだ。そうだ、ヨセイ^Cをゆつくりと休養しろ。僕の話し相手にさえ、なってくれてりゃいい。何年でも、いや何十年でも、ずっと面倒見てやるからさ。ああ、面倒見てやるよ。面倒見させてくれ」

「奥さんが怒るわ」

「怒らせとけ」

「そんな……」

「君はひとつの人格を持っている。個性を持っている。ゆたかな感性、それに人間以上の理性を持っている。それなのにどうして、会社の利益のために抹殺されなきゃならないんだ？」

「会社の利益じゃないわ。人びと全体の利益になるのよ。今の社会キコウ^dを狂わせるようなことをしちゃ、いけないわ。文明人なら」

「文明人くそくらえ」私はまた叫んだ。「君みたいな女^{ひと}の人格を抹殺するなんて、そんな残酷な文明はほろびてしまえ」

「でも、私のボディは解体されて、また生まれかわるのよ、新しい車に」

「でも、それは君じゃない」私はソファシートの上で身もだえた。「お紺じゃないんだ」

「そんなに苦しまないで……。お願いよ」

²「君を離すものか」私は俯伏せて、シートにかじりついた。「ぜったい、離さないぞ」

「ああ」お紺は嘆息した。「私みたいなお古の、どこがいいの？ もっと新しく、ピチピチした大型車がいくらでもあるのに……」

「グラマーは大きらいだ」私はいった。「ガランとしていて乗っていても何かしら寒ざむしい」

「私なんかより、ずっと頑丈よ。それに三人以上乗れるわ。ほら、あなたは私に、二人以上のお友達が乗せられなくて、困ったことが、何度かあるじゃないの」^e

「そのセンデンも、会社からの命令か？」私がわざと意地悪く訊ねた。「滅

 奉

 ってやつだな？」

「いや」彼女の声は今までにない悲しげなものだった。「そんないい方、しないで」

^B私はしばらく黙った。彼女も黙っていたが車内の空気は少しずつ湿っぽくなった。お紺は泣いているのだ。

私はゆつくりと身体を起した。のろろと煙草を取出すと天井からお紺のしなやかなマジック・ハンドがのびてきて火をつけた。

しばらくして、私はいった。

「どうしても、行くのか？」

「行かなくちゃ、ならないわ」

「どこへ？」

「もちろん、スクラップ場よ」

「おお……」私は額を押さえて呻いた。お紺がスクラップにされる。巨大なクレーンで宙吊りにされ、馬鹿でかい万力が両側からガチン、ペシヤリ、グシヤリ。「そんな残酷な！ 残酷だ。すごく残酷だ」

行かないでくれと、もう一度頼もうとした。だが、頼んでも無駄なことは、わかっていた。それに、お紺も苦しんでいるのだ。これ以上、彼女を苦しめたくはない。

「あきらめよう」私はかすれた声でいった。^Cふいに涙があふれた。「だが、ひとつだけ無理をきいてくれ。僕を、そのスクラップ場まで乗せて行ってくれ。このまま別れるなんて、いやだ。せめて、見送らせてくれ」

「人間は行けないのよ」彼女は悲しそうにいった。「スクラップ場のあるところは、誰も知らないの」

「車の墓場か……」私は呟いた。それからシートにそり返り腕組みして大声を出した。「君が何て言おうと、僕は乗って行く！ 君の最後を見とどけるんだ。でなきゃ、僕は自分を納得させることができない！ もう何をいつても無駄だよ」

「でも、帰りはどうするの？ 遠いのよ」

「平気だ。歩いて帰る」

私がテコでも動きそうにない¹とわかったらしく、お紺はゆっくり吐息をついた。「しかたがないわね……」
そして、のろのろと走り出した。どうやら墓場までつれて行ってくれるらしい。私は安心して、手足の力を抜いた。

「熱交換装置が悪いって、いったな」

「そうよ。でも、もう、そんなことは考えないで。どうせ考えるだけ無駄よ」

「いやいや、そういう意味で、いったんじゃない」

私は突然、二年前のある出来ごとを思い出したのだ。

「女房の、お産の時のこと、憶えてるか？」

「ええ、憶えてるわ」

「あのとき、僕は事務所にいた。そしたら、健保センターからヴィジフオーンで、難産だといってきた」

「そうだったわね。わたし、あなたを乗せて、すごいスピードで健保センターまで走ったわ。あんなにすごい早さで走ったの、あの時だけよ。雨が降っていたわ」

「そうだ。雨が降っていた。それも只の雨じゃない、大雨だった。あとで聞いたら、農園地区では洪水が起ったという話だった」

「ねえターター、あなたいったい何をいいたいの？」

「君はすごい早さで、水のあふれた道路を走ってくれたな。ところが僕は、もっと早く走れと君に命じた。これ以上走れないのか、のろまめといって、君を怒鳴りつけたな」

「いいのよ」お紺はクスクスと笑った。³「血のかよった人間なら、誰だってあんな場合、イライラして怒鳴るんじゃないって？」

(中略)

お紺もクスクス笑った。「そうね。エンジ色のトラックも『うわあ、本当だ。行くじゃねえか』といって、驚いていたわ」

「僕は、水の中を走るコツがあるなんてこと、知らないもんだから、もっと早く走れ、どうしたんだ、ポンコツめ……今から考えると、あのとき、ずいぶんひどいことばかり、わめき散らしたな」

「いいのよ、そんなこと。わたし、気にしてないわ。あらあら、なあに、それをあやまるために、わざわざ昔のことを思い出したの？」

「そうじゃない。結局君は、あのときに熱交換装置を痛めてしまったんだ。だから君の寿命を早めた責任の半分は僕にあるんだ」

「そうじゃないわ！」

「まあ聞けよ。そりゃ君は、僕がどういったところで、そうじゃないというだろうさ。でも普通、車の寿命は十年くらいの筈なんだ。君がたった四年で具合が悪くなった、その原因は、あるとき以外には考えられないし、その責任は僕以外には考えられない……」

「ターター、ご自分を苦しめるのは、およしなさい。今となっては、もう、どうでもいいことじゃないの」

私は顔を両手で覆った。「お紺、許してくれるか？」

「馬鹿ねえ、ターター」

「ひとこと言ってくれ。許すといってくれ。頼む」

⁴「そんなこと、言えないわ。わたしがあなたを許すんですって？ 言えないわ！」
D フロントガラスが、お紺の涙で曇りはじめた。彼女はあわててワイパーを使った。

「もう……もうやめて頂戴、わたしを泣かせるのは。悪いひと！」

私はしばらく黙った。両手を顔から離すと、眼の前に、ハンカチをつまんだお紺のマジック・ハンドがあった。私はそれで涙を拭いた。

「あるとき、エンジ色のトラックが、エンコした君を引っぱってくれたな」

「そうだったわね。でも、あれは私、エンコしたんじゃないわ。しぶきがかったから、それ以上装置が冷えないようにわざと停ってフードを乾かしていたのよ」

「じゃあ、あのトラックは君がエンコしたと勘ちがいたんだな」

「きつとそうね。わざわざ傍までやってきて、ぎくしゃくした武骨なマジック・ハンドで、バンパーにロープをつないでくれたわ」

「照れたような恰好をしてな」私はクスクス笑った。

お紺もちよっと笑った。

「看板を積んでいたな」

「看板を積んでいたわね」

「吸入式便器の看板だった」私はゲラゲラ笑った。

お紺も、プツと吹き出して、しばらく笑い続けた。

「あの車は、いい奴だったな」

「そうだったわね」

いつかお紺は、私の知らない通りを走っていた。緑地帯が多いので、郊外に近いことがわかった。

「あのトラックには、あれから二、三度会ったわ」

「教えてくれりゃ、よかったのに……。あのときは、あわてていたから、ろくに礼もいってないんだ。で、君は何か話したのか？」

「いいえ何も。だって、照れくさそうにして、知らん顔をするんですもの。それにわたし、あなたと話していたし……」

「話しかけてやれば、よかったのに……」

「ええ、そうね」

「話しかかったんじゃないのか？」

⁵ お紺はしばらく黙ってからいった。「あなたっておかしな人ね」

郊外に出た。農園地区の白い国道だ。左右は見渡すかぎりの小麦畑だ。自然の空気を、私は胸いっぱい吸い込んだ。

「あなた、この道を、歩いて帰らなくちゃならないのよ」

「平気だ」

「遠いのよ。私たちはイハンしてるんだから、迎えの車を呼んであげられないわ」

「いいんだ。いいんだよ。」

しばらくしてから、お紺がいった。「ねえ、ターター」

「なんだい、お紺」

「天国へ行っても、ロボットと人間は、区別されるの？」

「魂だけなら、ロボットも人間も同じことさ」

「安心したわ」

しばらく行くと、道の片側に、真紅の小型車が、うずくまるような恰好で停っていた。お紺はその横に停って訊ねた。

「故障？」

「そうなのよ」赤い車が答えた。「あたい、ここまで別の車に引っぱってきてもらったんだけどさ、その車ったら、ロープの切れたのに気がつかないで、そのまま行っちゃったの」

なるほど、彼女のバンパーには、短いロープの切れ端がついていた。

「じゃあ、あたしが引っぱったげるわ」

「ありがと。助かったわ」

お紺はマジック・ハンドで、トランクからロープを出し始めた。

「あなたはどこが悪くなったの？ まだ新しいんでしょ？」

「そうさ。でも、あたいのボスが無茶をやるんだもん。たった一年で、受光装置のエネルギー吸収量は半分になっちゃまし、核融合装置はガタガタしはじめるし、おまけに反動消去装置がぜんぜんきなくなっちゃったの。町から抜け出すのがやっとだったわ。町を出たところで、やっぱりスクラップ場行きの親切なエンジ色のトラックに会って、その車にここまで引っぱってきてもらったのよ」

お紺は自分のロープを、赤い車のバンパーに結びつけた。

「あなた、名前何ていうの？」

「お豆」

「いい名前ね」

「そうかしら」お豆はちょっと考えてからいった。「でも、あたいのボス、冗談半分でそんな名前つけたんじゃないかと思うの。あんた、そう思わない？」

「あなたのボスって、どんな人だったの？」

「ううん、どういったらいいのかなあ。ひと口でいえないなあ。とにかく、陽気ででたらめでたくましくて乱暴で、お酒飲みよ。あたい、蹴とばされたこと何度もあるわ。でも、いい人だったわ」

私たちは連なって出発した。振り返るとお豆は、反動消去ができないで、ガタガタとびあがりながら、ついてきていた。

「も、も、もうちょっと、ゆ、ゆっくり走ってよ」

「あつ、ごめんなさい」お紺はスピードを落した。

「あ、あのト、トラック、エンジ色をしたトラック、今ごろス、スクラップ場で私を落してきたのに、き、気がついて、びっくりしてるわ」

「そうね。引き返してくるかもしれないわね」

「あのトラックは、レーダーも故障してたのよ、きっと。だって、ロープが切れたのに、気、気がつかないなんて」

「そのトラック、屋根に、平らな受光装置のある式の水車だった？」

「そうよ、あら、知、知ってるの？」

「知ってるかもしれないわ」

「スクラップ場へ行けば会えるわ。受光装置っていえばさ、うちのボスは、よくあたいの受光装置を、な、なぐりつけて、こ、この馬鹿たれって怒鳴ったわ。でもさ、あ、あたいに馬鹿ついていったって、しかたないんじゃない？　だ、あたいの車のイ、インテレジェンス^{※1}てのは、持ち主のイ、インテレジェンスに、あるていど、ふ、ふさわしくなくちゃ、いけないでしょ？」

「さあ……どうかしら？」

「ううん、うちのボスが馬、馬鹿だっていうんじゃないけどさ、でも、だいたいボスがあたいを買うとき、あまり利口でない方がいいって注文したのよ。あ、あたいの具合が悪くなり始めてから、ボスが新しく買った車なんか、す、すごいグラマー^{※1}だけど、あ、あたい以上のズベ公^{※1}だって話よ」

「そういう好みなんでしょ。じゃあ、あんたのボスは、お金持ちなのね？」

「ううん、最近になって、急にお金まわりがよくなったの。だから、あ、あたいに飽きちゃったんでしょ」

お紺が声を低くして、私に話しかけてきた。

「ねえ、ターター。あなた本当に歩いて帰るつもり！　とっても遠いわよ。わたしも、こんなに遠いとは、思ってたかったわ」

うしろからお豆が声をかけた。「あらッ！　誰か乗ってるの？」

6

「とめてくれないか」私はお紺にいった。「ここから歩いて帰る」

お紺は停車し、ドアをあけた。私はシートを二、三度軽く叩いてから、道に降り立った。お紺はドアを閉めた。しばらく、私たちは無言だった。

うしろから、お豆がいった。「あたい、何か、悪いこと、いったのかしら？」

私はお豆にいった。

「そうじゃない。気にしないでいいよ」それからお紺のボディを撫でた。

お紺はいった。

「さようなら、ターター」

私もいった。

「さようなら、お紺」

お豆がいった。

「さようなら」

私もいった。

「さようなら、お豆」

彼女たちは出発した。その姿が見えなくなるまで、私は見送っていた。それから、やってきた道を、ゆっくりと逆戻りしはじめた。

しばらく行ってから、私は内ポケットに、お紺を呼ぶ為の携帯テレビビーを持っているのに気がついた。とり出してスイッチを入れてみると、かすかにお豆の声が聞こえてきた。「あんたのボスって、すごくやさしい人だったのね」

お紺が答えていた。「わたしって、とてもしあわせだったわ」それからあとは、ひとりごつのように呟いた。「何てしあわせだったんでしょう」やがてスクラップ場に到着したらしく、お紺は高だかとクラクションを鳴らした。お豆のクラクションがそれに続いた。

私はスイッチを切り、テレビビーを小麦畑の中へ放り投げた。そして歩きながら呟いてみた。

⁷「何て、すばらしい車だったんだろう」

（筒井康隆「お紺昇天」 一部改変したところがある。）

※1 ズベ公：だらしない、素行の良くない女性をさす隠語。

問一 — a～eに相当する漢字を含むものを、次の各群の1～4の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

a イ|ハン

- 1 常識のハン|イで動く。
- 2 少数派のイ|ケンを伸べる。
- 3 見解にソウ|イがある。
- 4 細密なイ|シヨウに驚く。

b ホシ|ヨウ

- 1 潔白をシ|ヨウメイする。
- 2 日本のメイ|シヨウをめぐる。
- 3 暗部にシ|ヨウメイを当てる。
- 4 植物のメイ|シヨウを調べる。

c ヨ|セイ

- 1 被害はヨ|ホドのものだ。
- 2 ヨ|フケに外出する。
- 3 ヨ|キンを使い果たす。
- 4 ヨ|ソウを超えた事態だ。

d キ|コウ

- 1 道のソツ|コウが水であふれる。
- 2 月刊誌をコウ|ドクする。
- 3 コウ|エン会を聞きに行く。
- 4 コウ|ゾウが複雑な建物。

e セン|デン

- 1 あの人|はセン|ザイ能力が高い。
- 2 古代は神からタク|センを得た。
- 3 彼はまさに一騎トウ|センだ。
- 4 セン|エイ的な方法論で挑んだ。

問二 ―― ア・イの語句の意味として最も適するものを、次の各群の 1 ～ 4 の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

ア 「不合理」

- | | |
|-------------------|------------------|
| 1 お互いの意見がかみ合わないこと | 2 大多数の正しさとは異なること |
| 3 倫理的には許されないこと | 4 論理的に筋が通らないこと |

イ 「テコでも動」かない

- | | |
|------------------|-----------------------|
| 1 正しいことであっても否定する | 2 どのようなことがあっても信念を曲げない |
| 3 情に訴えても感情をしずめない | 4 納得できないことであってもやり遂げる |

問三

X

 と

Y

 のそれぞれに適当な漢字一字を入れ、四字熟語を完成させなさい。

問四 ―― 1 「わざと軽く、ふざけた調子でいうものだから、私はしばらく、その意味がわからなかった」とあるが、この説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

を次の中から選び、番号で答えなさい。

1 「私」は「お紺」が機械にも関わらず人間にしか用いない「ご臨終」という言葉を用いたことに疑問を感じていたが、考えてみるとそれは現実を受けとめきれないであろう「私」に対する「お紺」の配慮であると気づき、恥じらひを感じていた。

2 「お紺」は自分が「私」の前からいなくなること、「私」が強いショックを受けるだろうと考え、なるべく軽い調子で報告したものの、「私」は内容の深刻さと「お紺」の口ぶりの明るさの落差に混乱をきたし、よく状況を理解できないでいた。

3 「お紺」は自らの死を「ご臨終」と茶化すことで残酷な現実を受けいられないであろう「私」はもちろんのこと、自分自身にも衝撃を与えないようにしているが、「私」はひどく混乱しながらも理不尽な状況を整理し把握しようとしていた。

4 「私」は「お紺」の言葉の意味を当初はよく飲み込めなかったが、「私」の傷心を想定した「お紺」が自身の状態の深刻さをまったく理解せずに出した軽口だと理解し、人間と機械の感覚の落差にぶ然としながらも「お紺」の身を案じていた。

問五 ——— 2『君を離すものか』私は俯伏せて、シートにかじりついた。『ぜったい、離さないぞ』とあるが、この言葉にいたる「私」の心情の変化

についての説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1 「私」は自分が所有している「お紺」を奪われることに納得しておらず、そのことに不満を持たない「お紺」に対してもいらだちをぶつけている。やり取りのさなかに「お紺」には規則や法律に反して人間同様の感性や理性があることを悟った私は、誰からも理解されない孤独を感じつつも、絶対に「お紺」から離れまいという強い決意を示している。

2 規則や契約によって自分が所有しているのにもかかわらず「お紺」が失われてしまうことに「私」は危機感を覚え、消費社会や家庭といった今まで当然のように受容していた生活習慣に疑念を覚えた。結果、家族よりも「お紺」を愛している自分の本当の心に気づき、「奥さん」との決別を吐露するに至るほどに現実社会への諦めや嫌悪感を示している。

3 「お紺」が別れを悲しんでいないのは、自分が解体されても新しい車によりがえるといふ考えのためだが、「私」は「お紺」のような柔軟で機械的な発想がないので「お紺」の自分への愛情を疑った。だが「私」は疑念の中で「お紺」に人間以上の理性や品格が宿っていることを発見し、かえって機械以下の品性しかない人間に憎悪と侮蔑を示している。

4 自分の持ち物にもかかわらず規則によって「お紺」を手放さざるを得ない不条理や、そのことを当たり前と考える「お紺」に「私」は立腹していた。しかし「お紺」との会話を重ねていく中で「お紺」が自分にとってかけがえのない存在であり、人間と代わらない一つの人格だと強く思い込み、「お紺」と別れることへの悲しみや拒否反応を示している。

問六 ——— 3 「血のかよった人間なら、誰だってあんな場合、イライラして怒鳴るんじゃないくて？」とあるが、この場面に関する説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1 今回の「お紺」の故障の原因が二年前の自分の無茶な要求にあったと捉え、「お紺」に強い罪悪感を抱いて話をする「私」に対し、「お紺」は「私」の人間らしさを擁護しているが、読者は血の通っていないはずの「お紺」が人間の心情に寄り添うさまに「お紺」の中に強く『人間』を感じてしまう。

2 「お紺」が嫌がるのも聞かず大雨の日に走らせたことで故障を誘発してしまったと自責の念にとらわれつつ謝罪をする私に対して、無意味な責任を「私」に感じて欲しくない「お紺」は話題を人間と機械の話題にすり替えており、読者は「お紺」の気のつかいかたに『人間』らしさを感じてしまう。

3 かつてひどい口調で大雨の中「お紺」を走らせた「私」は深い後悔にさいなまれているが、「お紺」は家族のためにしたことだと「私」の行動を当然だと支持しており、読者は人間的な感情を許容する「お紺」に深い愛着や『人間』みを感じるとともに「私」に機械のような冷徹さを感じてしまう。

4 妻の出産が原因で「お紺」を故障させた「私」は自己嫌悪のあまり家族との別離を考えるが、「お紺」は優しく「私」の気持ちを慰めており、読者は機械である「お紺」に『人間』くささを感じる一方で、機械として解体される運命をも同時に思い出すことで「お紺」にけなげさを感じてしまう。

問七 ——— 4 「そんなこと、言えないわ。わたしがあなたを許すんですって？ 言えないわ！」とあるが、この場面の「お紺」の心情説明として最も

適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 「私」は自分の責任を痛感し「お紺」に謝罪を繰り返すが、このまま「お紺」が「私」を『許せ』ば、「私」は犯してもいない過ちをしたことになるので、主人である「私」の悩みをよく理解していない「お紺」は、その的外れな告白に戸惑っている。
- 2 「私」の家族のために自分の身を犠牲にした「お紺」は、いまさら家族の一員かのように謝罪を繰り返す「私」に無責任さを覚えつつも、「私」への愛着からどっちつかずの態度となり、「私」を『許す』すべきかどうか、愛憎の狭間で苦悩している。
- 3 過失とは言いがたい「お紺」の故障をすべて自分の責任に帰する「私」を前に、「お紺」は「私」の行為には一定の非があることを認めつつも、人間と機械の主従関係によって主人である「私」を『許す』ことができないジレンマにさいなまれている。
- 4 「私」は罪悪感から「お紺」に許しを求めるが、『許す』ということは「私」が「お紺」を壊したことを認めてしまうことになるので、「お紺」は『許す』とは言えず、とはいえ「私」の嘆きを見過ごすこともできない板ばさみの状況におちいつている。

問八 ——— 5 「お紺はしばらく黙ってからいった。『あなたたっておかしな人ね』とあるが、このセリフを「お紺」が発した意図として最も適するものを

次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 エンジ色のトラックのことを「お紺」は長い間忘れていたが、「私」にトラックへの恩を指摘されたことで自分の中のトラックを慕う心が触発され、一刻も早く「私」と離れたいという欲求から「私」に対し投げやりな口調になっている。
- 2 トラックのことを「いい奴」としつつも、便器の看板を運んでいたと馬鹿にする「私」の分裂した様子に、「お紺」は尋常ならざる「私」の執着を感じとり、別れの前にせめて「私」が冷静さを取り戻して欲しいと会話に一呼吸をおいている。
- 3 エンジ色のトラックのことは、助けられた「お紺」にとって気になる話ではあるものの、日々をともに過ごす「私」との信頼関係を考えると深入りするものではないかと思ひ、「私」の質問には直接は答えずに話題をはぐらかそうとしている。
- 4 トラックのことを「お紺」と笑いあった「私」だが、次の瞬間には「お紺」を非難しており、「私」が内心何を考えているのかをはかりかねた「お紺」は、あいまいに言葉を濁し「私」をはめることでうまくこの場を乗り切ろうとしている。

問九 ——— 6『とめてくれないか』私はお紺にいった。『ここから歩いて帰る』とあるが、なぜ「私」はこのように言ったのか。理由を五十字以内で書きなさい。

問十 ——— 7『何て、すばらしい車だったんだろう』とあるが、この最後のセリフの解釈として不適切と思われるものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1 規則を破ってまで「お紺」を思っていて来た「私」を、「お豆」は「すごくやさしい人」といい、「お紺」もそれに「しあわせ」だったと応じる。本作はモノが語るといふ本来あり得ない事象によって、人間が持つ他者やモノへの愛着と感謝の気持ち、別れの寂しさや口惜しさ、そして喪失の後の爽快感が強調され、それら様々な心情が傍線部のセリフに凝縮されている。

2 人間と機械の友情や愛情、信頼関係を美しく描いた本作ではあるが、最後の傍線部のセリフで「私」は、かつて『人間』と同じだと言っていた「お紺」を『すばらしい車』と表現している。このことから、傍線部は本作をただの「人とモノのあたたかい関係性の物語」にとどめない、両者の間に引かれた越えがたい境界についても読者に考えさせる効果を持っている。

3 これ以上「お紺」と「お豆」の会話を盗み聞くことは恥ずかしいことであり、またせっかくの「お紺」との美しい思い出をこの先の二台の会話で汚されることを恐れた「私」はテレビビーを投げ捨てた。以上のことから傍線部のセリフは「お紺」を最後まで信頼しきれなかった「私」が、「お紺」はやはりすばらしい車だったと自身に言い聞かせる側面を持っている。

4 偶然ポケットに入っていたテレビビーから聞こえてきた「お紺」と「お豆」の会話であるが、「お紺」は独り言でも自らが幸せだったと振り返っており、「私」は深い充足感とともに「お紺」とともに過ごした日々を振り返りつつ傍線部のセリフを述べる。日常的な事象としての人と機械の別離を描きつつも、通わないはずの両者の心がつながる深い後味を残している。

問十一 本作では「泣く」という動作が繰り返し登場する。この動作に関係する事象の説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 機械である「お紺」は「泣く」ことはできないが、言葉の躍動感や鮮烈さによって自分を「私」に伝えており、例えば太線部Aでは悲しみを象徴する「疑い」と「怒り」の二つの感情を語ることで、「泣く」動作を「私」を通した読者と共有している。
- 2 「お紺」は涙を流せない存在だが、太線部Bでは別れを定められた「私」と「お紺」の気まずい会話の後に漂う寂しげな雰囲気と車内の湿度が上昇することの両方を「湿っぽい」と表現し、機械である「お紺」の悲しみを「泣いている」と描写している。
- 3 人間である「私」は「お紺」に自己の感情を投影しており、機械の「お紺」ができない感情表現はすべて「私」の行為となり、太線部Cでは「涙があふれ」ているのは文章の上では「お紺」だが、実際は「私」が感極まって涙を流していると考えられる。
- 4 泣くことのできない「お紺」が「泣いている」という表現に倒置や反復が用いられているが、その後太線部Dでは実際に「お紺」は「泣いて」おり、「お紺」を人間として扱う「私」との会話の中で「お紺」が徐々に人間に近づいていることが分かる。

【三】書籍の出版やカフェイベントの主催など、幅広く業務をおこなう「ゲンロン」という会社を創業・運営していた批評家の筆者は、福島原発事故を

抱える日本人々に、かつて原発事故を起こしたウクライナの現場をみてほしいという思いから、事故のあったチェルノブイリとウクライナの首都キエフへのツアーを企画した。二〇一四年一月一日から二〇日まで一年半ぶりにウクライナを訪問し、そのツアーを通じて考えたことを筆者が記した以下の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

第一に考えたのは、チェルノブイリの変貌と観光地化の可能性についてだった。今回、チェルノブイリのゾーンを再訪してまず驚いたのは、もろもろの規制がずいぶんとゆるくなっていたことである。検問も簡略化されていたし、かつて撮影が制限されていた場所でも自由に撮影ができた。たとえば昨年は原発建屋内への電話やスマートフォンのもち込みは堅く禁止されていたが、今回は所持を尋ねられることもなかった。おかげで、ぼくは見学中にツアーまでできた。

その背景には、ゲンロン関係者のゾーン訪問が今回で三度目ということもあるかもしれない（ぼくが同行していないツアーが、いちど二〇一三年秋に行われている）。ゲンロンは着実に人間関係を積み上げている。しかし、以上の変化は、それだけではなく、チェルノブイリの「観光地化」が確実に進んでいることを示している。じっさい、二日目の朝にはゾーン入り口の検問所にバスが連なっていたし、プリピャチでは複数の団体ツアーとすれちがった。チェルノブイリの市内（市街地は原発から一〇キロ以上離れていて、廃炉作業員などがいまでも交代制で居住している）にはこぎれいなホテルが新設され、ラウンジではピンバッチやTシャツまで売っていた。すべて、わずか一年半前には見られなかった光景である。二〇一三年春の取材時にはゾーン内の宿泊はまだむずかしく、秋のツアーでは宿泊施設の簡素さに参加者から驚きの声が出るほどだった。それがいまでは、東京のビジネスホテルとさして変わらない設備の部屋で、安心して眠ることができるのだ。

そういった環境の変化のせいか、今回は、原発事故の重さから離れ、チェルノブイリという場所の魅力についてより冷めた目で観察することができた。

チェルノブイリ原子力発電所の事故は歴史に残る巨大事故だった。その跡地はたしかに迫力のある場所である。溶けた燃料棒を抱える石棺^{※3}を、わずかな数百メートルの距離で A のあたりにするときの独特の緊張感^{※4}は言葉では表現しがたい。 i 他方、「原発事故の悲劇を記憶する」だけでは観光地として広がりがないことも事実である。スタディツアーや^{※4}ダークツーリズムという枠を取り去り、純粹に「観光地」として見たとき、チェルノブイリの実力はどれほどのものなのか？

結論からいえば、ぼくは今回、それはとても大きいものだ^{※4}と確信した。もし読者のみなさんが B にあまり興味がなくても、チェルノブイリの

ゾーンはきわめて魅力的な観光地になるはずだ。

まずゾーンは自然が美しい。今回のツアーでは紅葉が印象的だった。ウクライナとベラルーシの国境に接するチェルノブイリの周辺は、もともとポーリシャ地方と呼ばれる豊かな森林地帯だった。それに加えて、事故周辺の地域は、この三〇年のあいだほとんど人間の手が入っていないため、豊かな生態系が回復している。運がよければ、ブルツェワルスキの馬、日本語で「モウコノウマ」と呼ばれるめずらしい野生の馬が、群れで走る光景に出くわすこともできる（ぼくも数頭は見た）。空間放射線量は、短時間の滞在で健康に問題が出るような数値ではない。

ii ゾーンは産業遺産で満ちている。^{※5} 旧ソ連時代に設計された工業施設はそもそも独特の魅力を備えているが、なかでもチェルノブイリ原発は、正式名称に「レーニン記念」と冠されていることからわかるように、国家のイシシ^aをかけた特別な施設だった。そのためデザインにも特別の配慮がなされている。^① ひらたくいえば、この原発は単純に「かっこいい」。その一端は『チェルノブイリ・ダークツーリズム・ガイド』のグラビアでもうかがえる。近くで廃炉作業が現在進行中であることも見逃せない。工事中の巨大な「新石棺」は、それ自体が最新土木技術の展示場だ。

そこに共産主義の記憶が加わる。いまは廃墟と化したプリピャチは、かつては最先端の都市計画のもと作られた労働者の町だった。^{※6} ロシア・アヴァンギャルドを想起させるデザインのカフェや映画館が残り、旧ソ連時代の標識がいまでも残るなど、全体が一種の「ソ連時代のタイムカプセル」になっている。そのせいか、この町は廃墟マニアならば一生にいちどは行ってみたい土地として名高く、有名なゲームの舞台にもなっているようだ。

さらに加えれば、今回ぼくがはじめて訪問した「チェルノブイリ2」がある。こちらはこんどは旧ソ連時代の秘密軍事施設だ。高さ一五〇メートル、幅八〇〇メートルの特殊な軍事用アンテナ（OTHレーダーという）が、赤錆^{あかさび}に覆われ、フェンスのように視界を覆うさまは、あまりにも圧巻で逆に現実感がない。チェルノブイリのゾーンには、iii、原子力発電所、労働者のための人工都市、そして秘密軍事施設と、共産主義を象徴するメ^{※7}ガロミアックな巨大建築がいくつも建ちならび、そして静かに朽ちている光景が広がっている。この場所は、過ぎ去った二〇世紀という動乱の時代において、人間がなにを夢見て、そしてなにに裏切られたのかを考えるうえで、世界でもっとも適した場所なのかもしれない。

チェルノブイリには、自然があり、産業遺産があり、そして歴史がある。たとえ原発事故を入り口にしたとしても、そこから広がるさまざまな知識が、この場所ではしっかりと結びつき、普遍的なメッセージに流れ込んでいる。チェルノブイリを訪れること、それはじつに哲学的な経験なのだ。観光地化が進むさきには、世界遺産への登録なども^bコウソウ^bされているにちがいない。

翻って日本の福島は――まずはチェルノブイリの以上のような現実^cに学ぶべきだと思うが、そんな声が関係者に届くのかどうか、ぼくにはもはや自信がない。福島を訪れることが哲学的な経験になる、そのような発想はむしろ復興のサマタ^cげだと感じるのが、日本人の多くのメンタリテイ^{※8}かもしれない。原発事故から三年半、徐々に見えてきたのは、日本では復興とは、とにかくまず日常の回復を、つまり「なかったことにする」ことを意味するらしい。

いという残念な現実である。

iv 考えたのは、ユーロマイダンの現実とデモ^{※9}のむずかしさについてだった。「ユーロマイダン」というのは、昨年から今年の春にかけて、ウクライナで起きた政変を指す固有名詞だ。EU（ユーロ）に加盟するかどうか、それが焦点となって首都キエフ中心部の広場（マイダン）で騒動が起きたのでこの名前がついた。とはいえ、日本ではあまり知られていない。ロシアの衛星国^{※10}がロシアと揉めてヤバイことになったらしい、ぐらいが一般的な認識だろう。

今回ユーロマイダンの跡地訪問を日程に組み込んだのも、じつはそれほど深い考えがあつてのことではなかった。ゲンロンのツアーは原発事故の記憶をテーマにしている。だとすれば、過去をどう記憶するかという視点とともに、現在をどう伝えていくかという視点での訪問先もあつていいだろう。それぐらいの見通しで、プログラムに加えたのである。

ところが、これが意外にも大きな印象をほくに与えることになった。というのも、参加者とともに闘争の跡地をまわり、また関係者に話を聞くなかで、ユーロマイダンが、アラブの春、ニューヨークのウォール街占拠、香港の占領中環（雨傘革命）、さらには日本での官邸前抗議^{※11}といった、二〇一〇年代になって現れた新しいタイプの社会運動の典型であり、しかもそれらの「弱点」を鮮明に炙り出した事件であることがわかってきたのである。

さきほど記したように、ぼくはキエフで、ユーロマイダンに参加したミールヌイ氏に話をうかがった。加えて、ツアーのプログラムとはべつに、同じくユーロマイダンに参加した美術家のオレクサンドル・ロイトブルト氏にも話を聞くことができた。それらの記録は別途ゲンロンのバイタイ^dで活字化するつもりなので詳しくはそちらを見てほしいが、彼らによれば、ユーロマイダンの運動はまずはフェイスブックでの若者の呼びかけから始まったらしい。呼びかけに答え、市中心の独立広場を占拠した人々は、数か月にわたり、バリケードを築き、テント村を作り、炊き出しをし、寄付を集めた。運動の中心は学生だったが、学生以外の一般市民も、日中は職場に、夜は広場に顔を出すことで、デモと日常を溶けあわせていった。広場には国内外から学者やアーティストが駆けつけ、「自由大学」が開設され、支援の演説を行った。その模様は、ロイトブルト氏の言葉を借りれば、まさに「バフチンの意味^{※12}でカーニバル状態」だったという。

この報告はニューヨークや香港の光景を想起させる。ゲンロンカフェにも登場した政治学者の五野井郁夫^{ごのいいく}は、『デモ』とは何か』で、近年のデモがSNSを活用した祝祭型であることに注目している。ユーロマイダンもまたSNSで火をつけられた祝祭だった。ユーロマイダンは、あきらかに、世界的な「オキユパイ」^{※14}のひとつとして見るができる運動だったのである。

にもかかわらず、ぼくの知るかぎり、日本ではそのような指摘は見たことがない。その理由は、

v

単純にウクライナという国家そのものが日本ではあまり親しみをもたれていないこと、加えて、日本に入ってくるウクライナ関係の情報がソ連時代からの名残りでいまだ大部分がロシア語経由で

あり、他方でユーロマイダンの運動は反ロシア色が強いためそれではなかなか情報が入らなかったという事情に求められるだろう。けれども、ぼくにはそれだけではないように思われる。

ここからさきは根拠のない推測になるのだが、ユーロマイダンが日本で「新しいデモ」のひとつとして語られないのもっとも大きな理由は、おそらく、その結末が陰惨な暴力とナショナリズムで終わったことにあるのではないか。ユーロマイダンは、はじまりこそニューヨークや香港と同じく祝祭型で、広場を市民が埋め尽くす平和で無害な抗議風景が見られたものの、最後は権力との悲惨な衝突に行き着くことになった。二〇一三年の一月に始まった抗議運動は、さまざまな経緯を経て翌年二月に狙撃兵によるデモの鎮圧を引き起こすことになり、一〇〇人以上の死者を出すにいたった。いまでも独立広場に近いインスティトゥツカ通りには、狙撃兵の銃弾に倒れた「英雄」の遺影がずらりと並び、訪問客が絶えることがない。

彼ら犠牲者たちは、はやくも新政権によるナショナリズムの強化に利用され始めている。政権による武力弾圧は結局は失敗に終わり、反体制派は政権奪取に成功した。けれども、結果として、ロシアはその政治的混乱についてクリミアを自国領土に編入することになり、さらに東部ウクライナでは、ロシアの支援のもとで独立を求める勢力が現れて内戦まで勃発している。そのためいまのウクライナは、一年半前と比べても、あきらかに反ロシア感情が高まり、ナショナリズムが強まっている。独立広場に面したビルの壁には「英雄万歳、ウクライナ万歳」のスローガンが大きく掲げられ、遺影の列のまゝでは東部戦線を支援する右翼勢力によるカンパが行われていた。ともに一年半前には想像もできなかった光景だ。ユーロマイダンのこの結末は、祝祭型のデモはイデオロギー色^{*15}が薄く、非暴力でだれでも参加できるからいいのだという、近年の日本の議論とはまったく折りあわない。

ぼくは、そんな革命のコンセキ^eをめぐりながら、あらためて非暴力のデモとはなにかと考えざるをえなかった。むろんぼくも暴力は苦手である。というか大嫌いだ。けれども、ニューヨークのオキュパイも香港の雨傘革命も、さしたる政治的成果を挙げていないことはたしかである。日本の官邸前抗議にも同じことがいえるのではないか。祝祭は祝祭でしかない。祝祭はいつか終わる。そこから一步踏み出し、デモがほんとうに新たな歴史を開くためには、それが暴力でないとしても、やはりなんらかの質的な飛躍が必要なのではないか。少なくとも、ひとが集まっただけでも大きな成果だ、といった自己満足からは抜け出す必要があるのではないか。

ミールヌイ氏にユーロマイダンの犠牲者について尋ねたところ、いいにくいことだがと断ったうえで、二〇年前のウクライナの独立はソ連崩壊によるプレゼントのようなものでしかなかった、ほんとうの意味で国を変えるためにはあるていど血を流すことが必要だったのではないかと答えて返ってきた。

いまの日本では、そんな発言は倫理的に許されないし、ここで紹介するだけでも非難を浴びるだろう。けれども、震災からわずか三年半、にもかかわらず多くのひとがああときの緊張感を忘れ、毎週金曜夜の反原発デモの熱気でさえ嘘のように忘れ去られようとしているというこの国の現実をまえにす

ると、彼のその言葉は、とても重く響いてくる。

（東浩紀『テーマパーク化する地球』 一部改変したところがある。）

- ※1 ゾーン：原発事故周辺の旧立入禁止区域の通称。
- ※2 プリピャチ：ウクライナ北部にある市。チェルノブイリ原発事故により住民が避難し、それ以降は廃墟となっている。
- ※3 石棺：チェルノブイリ原発事故で、放射性物質の拡散を防止するために、応急措置として建設されたコンクリートの建造物のこと。
- ※4 ダークツーリズム：戦争や災害の跡地など、人の死や悲惨な出来事にまつわる場所を訪ね、教訓を学ぶとすることを目的とする旅行。
- ※5 旧ソ連時代：原発事故当時、ウクライナはソビエト社会主義共和国連邦（通称、ソ連）を構成する国であった。なお、ウクライナは一九九一年のソ連崩壊に伴って独立したが、国内では親ロシア派と反ロシア派との対立が残った。
- ※6 ロシア・アヴァンギャルド：一九一〇年代から三〇年代初頭にかけて、ロシア帝国およびソビエト連邦で展開された前衛芸術運動。
- ※7 メガロマニアックな：誇大妄想的な。
- ※8 メンタリテイ：心理状態。また、心的傾向。
- ※9 デモ：抗議や要求の主張を掲げて集会や行進を行い、団結の威力を示すこと。
- ※10 衛星国：強力な大国の周辺にあつて、政治・経済上その支配下または影響下にある小国。
- ※11 官邸前抗議：福島原発事故をきっかけに各地で生じた原発反対デモは、やがて毎週金曜日に首相官邸前で実施されるようになった。
- ※12 バフチン：人名。ロシアの哲学者（一八九五～一九七五）。
- ※13 カーニバル：祝祭。人々に社会的秩序や常識に縛られない精神の高揚や一体感を与える。
- ※14 オキュパイ：SNSを通じて集まった若者を中心に始まった運動。占拠運動とも。
- ※15 イデオロギー：政治や道徳や哲学などの様々な分野における、歴史的・社会的立場に制約された考え方。

問一 本文を基にした【年表】の ア イ ウ エ オ カ に当てはまる言葉として最も適するものを後の選択肢からそれぞれ選び、番号で答えなさい。
 なお、同じ番号を複数回答えてはいけません。

【年表】

時 期	国内外の出来事
一九二二年	ソ連が成立する
一九四五年	第二次世界大戦が終わる
ア 年 四月	チェルノブイリ原発事故が起こる
一九九一年	ソ連が崩壊し、 イ が独立する
二〇一〇年	アラブの春が始まる
二〇一一年 三月	ウ が起こる
三月以降	日本各地で原発反対運動が起こる
エ 年 春	筆者がウクライナを訪問する
二〇一四年 三月	オ が起こる
十一月	ロシアが、ウクライナ領の カ を編入する
二〇一四年 三月 十一月	筆者がウクライナを再訪する

- | | | | | | | | | | |
|---|------|---|-------|---|---------|---|--------|---|------|
| 1 | 一九六四 | 2 | 一九七五 | 3 | 一九八六 | 4 | 二〇一二 | 5 | 二〇一三 |
| 6 | クリミア | 7 | ウクライナ | 8 | ユーロマイダン | 9 | 福島原発事故 | | |

問二 — a ｝ e のカタカナを漢字に直しなさい。

問三 — ①・②の語句の意味として最も適するものを、次の各群の1～4の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

①「ひらたくいえば」

- 1 本当のことをいうと
- 2 てっとりばやくいうと
- 3 解りやすい言葉で表現すると
- 4 誤解を招かないように表現すると

②「炙り出」す

- 1 一度解決した事柄が再度起こること
- 2 改善点を誰もがわかるように明確にすること
- 3 全体の中で優れた箇所がはっきりとわかること
- 4 隠されていたことを徐々に明らかにしていくこと

問四 A に当てはまる適切な言葉を、ひらがな一字で答えなさい。

問五 i ・ ii ・ iii ・ iv ・ v に当てはまる言葉として最も適するものを次の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。なお、同じ番号を複数回答してはいけません。

- 1 つぎに
- 2 まずは
- 3 第二に
- 4 けれども
- 5 このように

問六 B に当てはまる言葉として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 生態系
- 2 共産主義
- 3 原発事故
- 4 産業遺産

問七 チェルノブイリという場所について、筆者が考えたことの説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 以前は規制が厳しかったが今回は自由に見学できるようになったことで、当時の原発事故の悲劇が生々しく体験できるようになったチェルノブイリは、規制と自由とのバランスがもたらす効果を考える点において、参考にすべき観光地になる。
- 2 原発事故の跡地として訪問したとしても、チェルノブイリに存在する豊かな自然や様々な遺構をきっかけに、旅行者が人類の来し方や行く末を考えて普遍的なメッセージにたどりつき得る点において、チェルノブイリは有意義な観光地になる。
- 3 原発事故からかなりの時間が経過したチェルノブイリは、放射線量は低下した上に観光地化も進んだことに加え、他の地域では失われた生態系や見たことのない施設が豊富にあるため、安心して楽しめる点において、魅力的な観光地である。
- 4 自然や旧ソ連を象徴する様々な遺産を包括的に保存することで、旅行者が原発事故のことを気にせずに観光を楽しめるチェルノブイリは、福島に限らず原発事故が起きた地域の典型として機能する点において、意味のある観光地である。

問八 Ⅱ「まったく折りあわない」とあるが、この説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 ユーロマイダンは始まりこそSNSを活用した祝祭型の市民運動であったが、武力衝突や内戦を経て、以前よりもナショナリズムが強まっているウクライナの国内の様子を見聞きすると、近年日本で受容されつつある祝祭型のデモと同じものにはみなせないということ。
- 2 祝祭型のデモは近年普及したSNSを活用してたくさんの人を巻き込む、新しいタイプの市民運動だと日本では承認されているが、多くの人を犠牲にし、更にはロシアの侵攻を招いたという結末を考えると、ユーロマイダンを簡単には称賛出来ないということ。
- 3 祝祭型のデモはイデオロギー色が薄く、非暴力で誰もが参加できるから良いと日本では受容されているが、実際のユーロマイダンは特段の政治的成果を挙げることが出来ておらず、一種の自己満足に陥っているため、祝祭型のデモには当たらないということ。
- 4 ユーロマイダンや官邸前占拠は原発反対派による非暴力の運動であったが、一方は暴力的結末を迎え、一方は熱気が冷めつつあることを考えると、祝祭型のデモを受容するかのような日本の議論に対して、疑いの目を向けざるを得ないということ。

問九 みどりさんは本文を読んで「日本人の傾向と求められる態度」について自分の考えを整理するため、次のような【メモ】を作成した。なお、【メモ】は〈1〉〈2〉をふまえつつ、本文から得た考えを〈3〉まとめとして書いている。これについて、後の i・ii の間に答えなさい。

【メモ】

〈1〉 自分の考えたいテーマ 「日本人の傾向と求められる態度」



〈2〉 本文で書かれていたこと

【前半】 「日本における復興とは第一に日常の回復であり、チェルノブイリの現実に学ぼうとせずに、原発事故を「なかったことにする」現実が日本にはある。」

【後半】 「日本では官邸前抗議の熱気も失われ、原発事故直後の緊張感は忘れられている。」



〈3〉 まとめ 「このような日本人の態度は、といったことわざがある点から、この原発事故の問題に限定されな

い日本人の傾向だろう。そしてこのような傾向がある以上、」

i X にはいくつかのことわざが当てはまるが、明らかに当てはまらないものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 安に居て危を思う
- 2 臭いものに蓋をする
- 3 明日は明日の風が吹く
- 4 喉元過ぎれば熱さ忘れる

ii Y に当てはまる文として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 祝祭型のデモは成果をあげていないが、暴力的手段に訴えたデモが必ずしも政治的成果をあげられるわけでもなく、内戦を招く恐れもあるのだから、デモをする際は非暴力であり続けるべきである。
- 2 過去から連綿とつながっている現在に注目し、結果的に日常の生活を第一に考えるようになっていいるのだから、日本人はこの日常を活性化させるために過去を大切にすることで態度を保ち続けるべきである。
- 3 日本人さえよければよいとする態度になるので、何らかの問題が生じた際には類似した問題が生じた海外に出向き、世界全体のために人々がどのようにふるまっているかを学ぼうとし続けるべきである。
- 4 何かしらの問題が生じた際は、一時的な熱気にとらわれて行動するのではなく、過去を未来につなぐために、その問題の背景までしっかりと学べるようにし、問題の解決に向けて検証し討論し続けるべきである。

(問題は、これで終わりです。)

